**出雲大社の概要**

出雲大社（「いずもおおやしろ」、又は「いずもたいしゃ」とも呼ばれます）は、日本で最も重要な神社の一つです。主祭神は、国造りと縁結び（つながり・絆）に関わる神である大国主神です。縁結びというと、恋愛や結婚のイメージが強いですが、その意味はもっと広いものです。大国主神は人と人とのつながりをはじめ、様々なつながりを守る役割を担っています。

出雲大社の創建の正確な時期は定かではありませんが、古事記、日本書紀、出雲国風土記など、日本最古の文献にその名が記されています。これらの書物はいずれも8世紀初頭のもので、出雲大社が日本の歴史の中で古くから重要な位置を占めていたことを示しています。古事記に収録されている神話の3分の1が、出雲地方を舞台にしています。

この大社の起源は、これらの初期の書物に記されている「国譲りの神話」にあります。物語は、大国主神が長い年月をかけて農耕技術や薬を開発し、地上の世界を統治するところから始まります。天照大御神は天上の世界からこの地を見て、自分の子孫がこの地を治めるべきだと考えます。大国主神は国譲りに対する敬意を表して大社を建てることなどを条件に、統治権を譲ることを承諾します。

出雲大社の主な建造物は、創建以来、何度も造営されてきました。初期の本殿は、高さ48メートルもあったと言われています。10世紀の教科書「口遊」には、出雲大社が国内最大の建物であり、奈良の東大寺大仏殿や、京都の朝廷の行政の建物である大極殿よりも大きいと記されています。この時代には、「」と呼ばれていました。

 また、中世や近世初期の出雲大社の境内を描いた絵図では、本殿の柱は赤く塗られており、現在に至るまでの長い神社の歴史で様々な変化を遂げてきたことが分かります。現在の本殿は、1744年に造営が完了しました。1871年には、古くからの地域性や神話との関連性を考慮して、「杵築大社」から「出雲大社」に改称されました。現在では、大国主神の縁結びのご利益を求めて、1年間に数百万人の参拝者が訪れるほか、長く入り組んだ歴史に惹かれる人も多くいます。